

副校長コラム(修学旅行に寄せて)

副校長 堀江 嘉明

いよいよ、行永分校中学部3年生が「修学旅行」に出発します。日常生活ではできないさまざまな体験を通じて、仲間とともにかけがえのない多くの「思い出」を作りたいと願っています。

さて、学校生活の中でも最も印象深いとされる「修学旅行」はいつから始まったのでしょうか。

通説では136年前の1886(明治19)年とされています。いわゆる「学制」の発布が1872(明治5)年です。当時は、「富国強兵」の旗印の下、西洋列強に追いつくべく近代国家の樹立が急ピッチで進められていました。それと併行し、近代国家を支える人材育成のために、「国民皆学」が奨励され、義務教育制度も開始されました。

当時、義務教育の学校などの教員を養成する高等教育機関であった「東京師範学校(現在の筑波大学の前身)」の学生たちが教育活動の一環として千葉県の銚子方面に徒歩で移動した「長途遠足」がいわゆる「修学旅行」の起源とされています。(ただし、この時はまだ「修学旅行」という名称は公的にはありませんでした。)この「長途遠足」は2月15日から2月25日まで、つまり10泊11日という極めて長期間の日程でした。当時の世相を反映して、野外での軍事教練と文化財の見学などが中心でした。

その後、1888(明治21)年に当時の文部省が作成した「尋常師範学校」つまり尋常小学校の教員を養成する高等教育機関の設置に関する規則の中に、「修学旅行」という文言が記載されています。ここから、「修学旅行」という名称が一般的になったようです。

大正時代になると、軍の施設や軍艦等の見学、伊勢神宮や橿原神宮等などの参拝、満洲(現在の中国東北部)及び朝鮮半島などへの修学旅行も実施されました。しかし、昭和時代に入ると、アジア太平洋戦争の戦局の悪化に伴い、1943(昭和18)年以降は修学旅行は残念ながら「中止」となります。

戦後になると、食糧不足と交通インフラの破壊という悪条件の中ではありましたが、早くも1946(昭和21)年には各地の学校などで「修学旅行」が復活し、戦後復興と経済成長の進展と併行し、「修学旅行」実施校も次第に増えていきました。

先の戦争で日本の主要都市が空襲で焼け野原となり、多くの犠牲があったにもかかわらず、「修学旅行」が早くも再開されたのはなぜでしょうか。

「修学旅行」の持つ教育的意義は時代を超えて極めて大きいものです。未来を担う子どもたちにかげがえのない体験をさせたいという「思い」が大きく実を結んだのではないのでしょうか。

参考資料など

- ①国立公文書館アジア歴史資料センターホームページ
<https://www.jacar.go.jp/glossary/tochikiko-henten/qa/qa15.html>
- ②公益財団法人日本修学旅行協会ホームページ
<http://jstb.or.jp/files/lib/2/18/201301312006107670.pdf>